

「すべての子どもたちへの心理的、教育的支援のあり方」

I. 主題設定の理由

学校現場には、いじめ、不登校、暴力行為等、生徒指導上の課題が山積している。教師の体罰により子どもが自殺するという事件も発生し、社会問題化した。

これらの背景には、地域での交わりの希薄化、核家族化や子どもの数の減少等、現代の子どもたちを取り巻く状況に、社会性を育むための基盤そのものが弱くなってきていることが挙げられる。また、インターネット社会の到来により、スマホやLINEを使う生活の中から多くの問題も生じており、それが、いじめ、不登校、暴力、自死等の問題の素地になっているという面も指摘されている。

そんな中、他者との関わりに臆病になったり、苦手意識をもったりしたままに学校生活を送る子どもや、学校が楽しい場所ではなくなってしまう子どもも見られる。

このような現代社会を生きる子どもたち全てを援助しようとする枠組みが、「石隈・田村式援助シートによるチーム援助」(図書文化)に、子どもの求める援助の程度に応じて、3段階に整理されている。

一次的援助・・・「全ての子ども」への援助

日頃の教育活動、開発的・予防的な活動

二次的援助・・・配慮を要する「一部の子ども」への援助

子どもの苦戦が大きくなり、子どもの発達を妨害することを予防することを目指す

三次的援助・・・特別に個別の援助を必要とする「特定の子ども」への援助

一次的・二次的援助も含まれた総合的な援助

本部会では、ここ数年、一次的援助についての理論研究、実践研究を進めてきた。具体的には、エンカウンター、アサーショントレーニング、ソーシャルスキルトレーニングなどを指導に取り入れ、子どもたちの支援をしてきた。更に、平成25年度からは、「Q・U」アンケートによる学級集団分析なども取り入れ、い、「学級内の一人一人の状態」、「学級集団の状態像」「学級集団の状態と個々の児童の関わり」を的確に把握し、その結果を生かし、子ども一人ひとりへの支援や声掛けの方法を工夫し、集団や個へのアプローチの方針を立ててきた。

子どもたちの心の根底には、「一人の人間として大切にしたい」という願いがある。「生きにくさ」を抱える子どもであればなおさらである。子どもたちの人として当たり前にもっているその願いに寄り添い、一人一人の生き方への関心に応える指導・支援の在り方を考えていきたい。以上のような理由から、子どもたちの基本的人権を尊重する態度を基盤に、問題への予防的・開発的な意図をもって、心理的・教育的支援を行いながら、集団づくり、人間関係づくりを進め、子どもたちの自治の力を育てていくための研究を進めることとする。

## II. 具体的な研究内容

1. 2回の授業実践からそれぞれの学級経営を学び合い、生徒理解に生かした。  
9月・・岩森真由美先生（井尻小2年） 1月・・竹川きよみ先生（岩手小5年）
2. 全員が、実践報告を行い、実践から見出された課題について、意見交換や情報交換を行った。また、小・中の実践内容を交流することで、発達段階を踏まえた指導の在り方や小・中の連携の在り方について考える機会をもった。
3. 渡邊幸之助校長先生（秋山中）による学級づくり講座から、学年経営、学級経営の指導や実践方法を学ぶ。

## III. 成果と課題

### 1. 成果

- (1) 子どもたちへの指導・支援に具体的にどのような手立てを考えればよいのか、研究の方向性がわかりやすいテーマであった。受容的な学校・学級の雰囲気は子どもたちが学校生活を送るうえで、大切な要因の一つである。今年度の2本の研究授業の、子どもたちの生き生きとした表情から、学級の居心地の良さ、子どもの主体性を大事にした学級指導の積み重ねを感じた。
- (2) 構成的エンカウターの実践と検証、QUによる学級集団分析、リーダーの育成など多くの実践事例の報告、小中の情報交換、講師を招いた学級づくりの研修会が行われた。また、部員一人ひとりが抱えている課題や具体的な実践やその結果などを交流し合うことで、それぞれの学級経営や生徒理解に生かすことができた。学級が土台であることを再確認できた。
- (3) 2回の授業研究は、2人の担任の先生のきめ細かな指導と児童理解に基づいたもので、すばらしかった。学校行事を一年間見通し、1年後のゴールを意識した学級計画や一人ひとりの子どもたちの状況に応じた声かけや授業を成立させるための準備など学ぶことが多かった。子どもたちの楽しそうに授業を受けている姿に、一人ひとりの居場所があることを感じた。
- (4) 講師を招いての学習会では、理論のみならず、実践の具体的な資料を見せていただく中で、学級づくりのヒントや方法を学ぶことができた。どのように学年経営や学級経営をすすめるかという実践分野の研修の機会は貴重である。

### 2. 課題

学級という集団の中には、さまざまな子がいる。日常の行動観察、QU検査の結果などから、子どもたち一人ひとりに向き合ったより有効な手立てを考え、実践していきたい。部員数が少ないため、部員一人ひとりが自覚や責任をもって参加できた。しかし、県教研への参加や、年2回の授業研究は一人一人の負担が大きい。小学校と中学校で交流しそれぞれの実践や指導法を学びあえたことは意義がある。そういう場をどう確保していくかが課題である。

（部長 根岸 喜久恵）